どとの社会関係や偶発的な出来事など様々な要因の影響下で、自らの進路を決めているはずである［e.g. 奈良 2016］。そうした必ずしもイスラーム法と国家の法の関係性に還元されない領域が本書では等閑視される傾向にある。著者が述べるように「民間」が人々の不断の実践によって生成される領域であるとすれば、一般信徒の日常的実践を射程に入れた事例を通して「民間」をより重層的なものとして分析することができたように思われる。

とはいえ、これらのコメントは上述した回族研究ならびにイスラーム研究に果たす本書の意義をなんら損なうものではない。これらは本書がイスラーム法を中心とした豊かな民族誌的記述を行っているがゆえに生まれてくるものであり、本書は近代国家を生きるムスリムのあり方を理解するうえで有用な優れた民族誌である。

＜参照文献＞

奈良雅史 2016『現代中国の〈イスラーム運動〉――生きにくさを生きる回族の民族誌』風響社.

Gillette, Maris Boyd. 2000. *Between Mecca and Beijing: Modernization and Consumption among Urban Chinese Muslims*. Stanford: Stanford University Press.

Gladney, Dru. C. 1996(1991). *Muslim Chinese: Ethnic Nationalism in the People's Republic* (Second Edition). Cambridge and London: Council on East Asian Studies, Harvard University.

（奈良　雅史　北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授）

齋藤剛 『〈移動社会〉のなかのイスラーム――モロッコのベルベル系商業民の生活と信仰をめぐる人類』（地域研究ライブラリ）昭和堂　2018 年　530 頁

本書は、著者の詳細な現地調査に基づいて既存の研究や理論を批判的に検証し、新たな定義を示した意欲作である。タイトルにもあるように人々の移動や多様性に着目し、「聖者信仰的なもの」が固定化された分析概念ではとらえきれず、日常生活との連続性の上に成り立っていることを示した点が、本書の大きな成果である。

本書は 2007 年度に東京都立大学に提出された博士学位論文と、その前後に発表された論文や原稿をもとにまとめられた、モロッコ南西部スース地方を故郷とするベルベル系シュルーフ人、インドゥッザルの人々を対象とした人類学的研究である。全 9 章（序章、終章と本論 7 章）からなる本書の構成は、以下の通りである。

序　章　移動とイスラームへの視座
第 1 章　生活からの聖者信仰への視座
第 2 章　ベルベル人と民族的差異――アマズィグ運動と「境界的思考」
第 3 章　情報と人的ネットワークの結節点としての故郷
第 4 章　シュルーフの商いと社会関係構築の諸相
第 5 章　「大聖者」ベン・ヤアコーブの末裔とスース地方東部社会の紐帯
第 6 章　モロッコ南部山岳地帯における部族民と聖者祭・廟参詣
第 7 章　聖者信仰の本質化を超えて――フキーによる治療が意味するもの
終　章　聖者信仰を広げる世界、聖者信仰が開く世界

序章では、まず本書タイトル中に「移動社会」と記す意図について、中東では移動が常態であり、グローバル化や国民国家の枠組みでとらえるよりも実態に即していることを示すためであると説明される。さらに、既存のイスラーム研究において「聖者」は、神からの恩寵を受けたり、奇蹟を起こしたりすることのできる人物と定義されてきたが、本書を通じては「聖者信仰的なもの」を、日常生活の連続性の中でとらえ直すことが方向性として示されている。

第1章では、社会人類学者大塚和夫が提唱した「民衆イスラーム論（知識人と民衆を対極に置き、両者の関係を知識の多寡、知識の伝達継承を通じて理解しようとする論）」を批判的に検討している。民衆イスラーム論の問題点として著者は、知識の多寡に着目することで民衆が受動的存在に矮小化されてしまう点や、知識の内容がイスラーム的なものに限定されてしまう点などをあげている。また、民衆イスラームの代表例の一つとされる聖者信仰に関連して著者は、聖者の概念をより広範な「祈願の効力があると信じられている人」と定義づける。むしろ両者は連続性のうちにとらえるべきものとする立場である。この定義は、第7章で詳述されるフキーなど、これまで聖者として認識されてこなかった人々をも含むため、今後新たな聖者像の提示や、聖者という名称の妥当性の再検討がなされる必要があるだろう。

第2章では、「ベルベル人」概念について検討している。モロッコでは植民地期の分割統治政策によってベルベル人の民族概念は固定化されたが、1956年に独立すると、その概念は一部の人々に継承されるとともに、新たにアマズィグ運動（北アフリカ諸国における言語権や教育権を希求し、自らが北アフリカの先住民であると自認する動き）が顕在化した。同運動は2000年代以降、国家の後押しもあって盛り上がりをみせたが、アマズィグという民族概念のみを排他的に選択することや、アラブとベルベルの差異を固定化することは、多様な背景を持つ彼らを一元的に理解するものであり、中東に生きる人々の現実にはそぐわないと著者は警鐘をならす。

第3章では、インドゥッザルの人々の故郷との関わりについて論じている。既存研究では、地方社会と都市は異なる空間として分析されてきたが、著者によると移動が常態である中東諸社会においてベルベル人の生活は、故郷と都市との連続性の上に形成されている。出稼ぎで都市に居住する同郷者ネットワークは緊密に保たれており、8月の休暇とイスラームの2大宗教祭で帰省した際も、密に情報交換を行う。地方出身の都市在住者にとって故郷とは、常に関心の対象であり、ときに理想化して語られ、心身ともに絶え間なく行き来する場であり、同郷者同士をつなぐ機能を果たしているのである。

第4章では、インドゥッザルの人々の出稼ぎ／商いと都市生活において、さまざまな背景を持つ民族や人間関係が、どのように形成されているのかについて論じている。著者の参与観察で明らかになったのは、人間関係が家族や親族、部族、同郷者、民族などの属性に加えて、その都度状況に応じて柔軟に変化する点である。しかしながら、板垣雄三が提示したアイデンティティ複合論（中東・アラブ世界における個人の持つアイデンティティは唯一無二のものではなく、複合的なものであるとする論）では、現実の複雑性や名とは無関係な不確定要素が矮小化されてしまう問題があり、人間関係の構築でむしろ重要であるのは、そのような属性をふまえた上での経験や相手の人柄、相性、身振りなどであると著者は結論づける。

第5章では、ベン・ヤアコーブとその子孫ヤアコービイーンについて詳述している。著者によると、ベン・ヤアコーブ（d. 1555）とは、スース地方随一のムスリム聖者であり、多くのウラマーを輩出した家系ヤアコービイーンの名祖でもある。ベン・ヤアコーブが預言者の末裔とされ、「正統」なスーフィー、禁欲の実践者、奇蹟を起こす能力を持ち、権力者に承認された人物であったという諸点に加え、他の大聖者との交流があり、互いに認め合っていたとされる点が、ベン・ヤアコーブの威信を一層高めている。ヤアコービイーンはまた、勢力を持っていたナースィリー教団と積極的に関わって学問の研鑽を積むことで、知識人として、またナースィリー教団に密接に関わる家系として、自分たちの立場を確立し、広域的なネットワークを有するまでに至ったと筆者はいう。ヤアコービイーンらの絶え間ない学問活動は、来歴に不明点が多いベン・ヤアコーブの名を高め、その名声はさらにヤアコービイーンの社会的地位の確立に結びついたといえるであろう。

第6章では、ベン・ヤアコーブとその孫ベン・アトマーンの聖者祭の事例をもとに、聖者祭の本来の意義について検討している。聖者祭の最後に催される供儀と祈願への参加は半ば強制であるが、廟参詣については個人の裁量に委ねられている。聖者祭には廟参詣に批判的であったり無関心であったりする人も参加するが、それを可能とするのは、供儀や祈願が行われるのは廟の外であって、供儀と祈願自体は日常的に行われる行為であるという事実であり、廟参詣を行う人との間に衝突が起こることはない。聖者祭をさす「アンムッガル」が、本来は「集まる」を意味するように、廟の存在は、人々が集まる機会と場を提供するきっかけにすぎないと著者は指摘する。本章では「集まらなかった人」にも言及し、参加した人の話や土産物をとおして参加しなかった人々にもその経験が共有され、集積されていくことも示される。参詣を目的とした

人々のみを中心としてきた既存研究に対して、無関心な人や批判的な人、参加しなかった人にも焦点を当てた点で本章は画期的であり、物や語りをとおしての経験の共有は、新たな聖者信仰研究を開く視点となるであろう。

第7章では、フキーによる治療儀礼をもとに、聖者信仰と民衆イスラームについての再検討がなされている。治療儀礼をとおして明らかとなったのは、「聖者信仰的なもの」が、一般の人々の主体的解釈の上に成り立っているという点である。また、評者が特に重要であると考えるのは、聖者信仰にみられる特徴が、批判的な人や一見無関係な人をも取り込み、人々の生活の中にどれほど深く浸透し、それが人々の経験や認識として現れているかという点である。日常生活にもみられる聖者信仰的なものに着目すると、もはやそれは廟を中心とした従来の聖者信仰研究とは大きく異なる内容となることが予想され、「聖者信仰」の定義や分析概念そのものの再検討が必要となるであろう。

終章では、これまでの議論を総括し、著者の主張が述べられている。本書では、民衆的なイスラームにかかわる既存の研究と理論を批判的に検討し、聖者信仰的なものを日常生活との連続性のうちにとらえ直した。治療儀礼の事例で示されたように、日常生活との連続性の中に神の恩寵や祈願、奇蹟をとらえ直すならば、聖者信仰を特徴づけるものとしてこれらの概念を特別視する発想から距離を置く必要があると著者はいう（p. 307）。治療儀礼を皮切りに、日常生活の中での聖者信仰的なものについての著者の事例研究や分析が、今後も期待される。

既存の民衆イスラーム論の中では、イスラーム知識人と民衆の間には越えられない知的隔たりが前提とされていた。しかしながら、現在では地域差があるとはいえ、識字率も高まり、インターネットなどの情報インフラや交通網の発達等により、「民衆」であっても「知識人」になる機会は増えている。聖者と民衆を連続性のあるものとしてとらえる著者の視点は、このような現在の状況を考察する上でも有用な分析概念であると評者は考える。

これまで受動的存在として分析されてきた民衆を主体として、既存の理論や研究を検討し、新たな定義付けをおこなった本書は、民衆イスラームや聖者信仰研究に新たな道を開いたといえる。ただその定義は新しく画期的であるがゆえにまだ精緻に分析される余地がある。本書はその先導役となり、今後の同分野の研究の発展に十分に資するであろう。

（藤井　千晶　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）
附属ケナン・リファーイー・スーフィズム研究センター特任准教授）

タヌーヒー 『イスラム帝国夜話』上下巻（森本公誠訳）岩波書店　2016–2017年　上巻541頁、下巻601頁

本書は、10世紀後半、ブワイフ朝期のイラク地方に生きた法官タヌーヒーによる逸話集『座談の粋として記憶すべき数々の物語』（*al-Nishwār al-Muḥāḍara wa al-Akhbār al-Mutadhākara.* 書名の訳は本書の訳者による。以下『座談の粋』）の原語であるアラビア語から日本語への翻訳である[1)]。

まずは訳者の紹介から始めたい。訳者の森本公誠氏は、『初期イスラム時代におけるエジプト税制史の研究』でパピルス文書を用いた先駆的研究を行ったことで名高く、その英訳版は現在まで初期イスラーム時代の制度史研究、パピルス文書研究において必ず参照すべき古典的研究として、海外の学界においても高く評価されてきた［森本 1975; Morimoto 1981］。また、氏はイブン・ハルドゥーンの『歴史序説』の翻訳者でもある［イブン・ハルドゥーン 1979–1987］。現在日本でもイブン・ハルドゥーン研究が盛んに行われているが、その基礎を築いた一人が森本氏であったことは間違いない。そして、氏が既に『座談の粋』の訳業を終えられていることを評者も数年来仄聞しており、翻訳の刊行を待ちわびていたところであった。

さて、本書の原著者とその著作について、簡単に紹介しておこう。著者であるタヌーヒー Abū ʻAlī

1）なお本訳書に関しては、既に橋爪烈氏による書評がある［橋爪 2018］。あわせて参照されたい。また、本訳書の原典書名については、『座談の糧』とされることが多いが、訳者の選択した書名を用いることとする。Nishwār の解釈については［Tillier 2007: 3, n. 12］および［橋爪 2018: 30–31］を参照。